+

学生とともに地域で暮らす

-調査実習と地域への成果還元-

徳島大学 総合科学部 社会創生学科　内藤直樹

+

徳島大学 総合科学部 社会創生学科

医学部　歯学部　薬学部　工学部

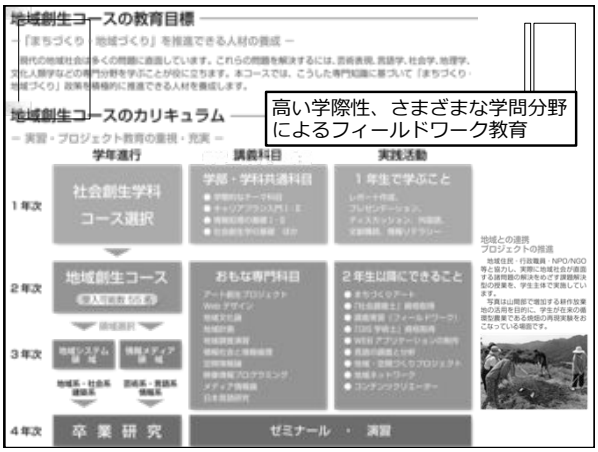
総合科学部　定員265名

- 人間文化学科
  - 国際文化コース
  - 心理・健康コース
- 社会創生学科
  - 公共政策コース
  - 地域創生コース
  - 環境共生コース
- 総合理数学科
  - 数理科学コース
  - 総合物質コース

従来の人文・社会・自然の学問分野の枠にとらわれることなく、さまざまな視点から自然現象や社会現象を分析し、現代の諸問題に対して有効な解決方法を模索しています。

教員 133人中 文化人類学/民俗学 2

学際的な視点で地域の課題解決をおこなう実践的教育を重視

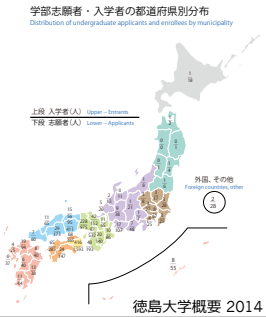


高い学際性、さまざまな学問分野によるフィールドワーク教育

+

わたくし自身の状況について

- **地方国立大学出身**
  - 身近な場所の見かたが変わる経験
- **文化人類学の世界へ**
  - 京都大学に進学し、アフリカ研究
  - 国立民族学博物館に勤務
- **地方国立大学の新任教員**
  - ２０１１年１０月着任（３年目）
  - 学際的な地域/まちづくり教育/研究/実践の場
  - ジモトの学生がメイン
    - 生活の場をこれまでと異なる視点で捉えることを促す



徳島大学概要 2014

+

【背景①】複数のフィールドワーク教育の併存

- 大学に対する社会的要請
  - 大学の役割は、教育と研究と**社会貢献**
    - 地／知の拠点（COC :Center of Community）整備事業
    - 大学の再編
- 学問と社会の関係（学問の公共性）
  - …社会的な需要を喚起できない学科や科目は、教育・研究の現場という学問的再生産の場において淘汰されざるをえない。日本の人類学は、まさにこうした「at home」の大学教育の現場において、何を目的とし、何を対象とし、誰に向かって、何をどのように語る学問であるのか、厳しく問いなおされている[杉本 2007:188]」
- フィールドワーク教育の隆盛
  - 複数のフィールドワーク教育の併存

+

【背景②】文化人類学的フィールドワーク教育の意義

- 「実験」と「フィールドワーク」
  - フィールドワークは統制されない環境で起こる現象を観察
    ⇄ 実験は統制された環境で起こる現象を観察
  - フィールドワークは、自然科学と人文・社会科学の両方で実施されているが、その目的や方法は学問分野によって異なる
  - 文化人類学的フィールドワークの特性や意義を「現場に行くこと」だけで説明することはできない

本発表の目的と方法

■**目的**

■さまざまな学問分野を背景にした複数のフィールドワーク教育が併存する状況のなかでの「文化人類学的フィールドワーク教育」の特徴や意義について考える

■**方法**

■徳島県沿岸部における津波防災をテーマにした課題解決型授業の事例を検討

課題解決型授業 (Project-Based Learning: PBL)

① 具体的課題の解決が目的（アウトプット・総合力志向）

② チームの力による課題解決

③ 受講者の自主性・自律性の重視

■医・歯・薬・看護系、情報系、教育系で実施

■「大学の外」での実践的な学び

■従来の教育手法では育成が難しかった能力（実践力・総合的な能力/スキル）の育成が可能

文化人類学的フィールドワークの特徴①：暮らしのなかで考える

■参与観察（Participant Observation）

①長期（１～２年）の現地滞在

②現地の言語の習得

③ラポール（信頼関係）の構築

④現地社会の一員として社会生活に参加

■「原住民の視点（the native's point of view）」

（Malinowski, 1884-1942）

「実生活の不可量部分 (マリノフスキー 1922)」の理解にむけて、インサイダーの視点に身を置きつつ（「参与」）、アウトサイダーの視点で「観察」

・対象を客観的に観察することよりもむしろ、観察者の主観をも交えつつ浮かび上がるある種のリアリティを粗づかみにする点が特徴

・対象となる人びととの長い付き合いのなかで学ぶこと

文化人類学的フィールドワークの特徴②：文化相対主義を＜実践する＞

■（自）文化を見つめ直すこと

■「文化人類学という学問は、奇妙でしばしば消滅の危機にある異文化について記述し、それを理解することだけにあるのではない。異文化と自文化を比較することを通じて、それまで「当たり前」すぎて気にもとめなかった（自）文化を見つめ直すことにある（内藤 2014）」。

■文化相対主義

■諸文化はそれぞれにユニークで豊かな内容を含んでおり、文化間に優劣をつけることはできないという価値観

■「文化相対主義の核心は、文化の違いの尊重、それも相互の尊重の態度を養うことである。たったひとつではなく、多くの異なる生活様式の価値を強調するということは、あらゆる文化を肯定的に評価することだ (ハースコヴィッツ 1948）」

■文化相対主義を実践することの困難

■文化相対主義的な価値観は、エキゾチックで安全な「他者」の存在を許容する現場というよりはむしろ、自分には受け入れがたいが関わらざるをえない「他者」とともに生きるやりかたを探る現場においてこそ必要とされている（内藤 2014）。

発表の構成

■文化人類学的なフィールドワーク教育の特徴（仮説）

■対象となる人びととの長い付き合いのなかで学ぶこと

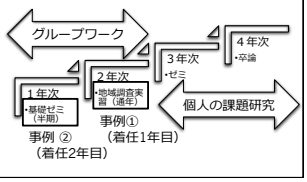
■自分には受け入れがたいが関わらざるをえない「他者」とともに生きるやりかたを探ること

■住民主体の津波防災をテーマにした課題解決型授業（PBL）

■事例①：着任一年目

■事例②：着任二年目

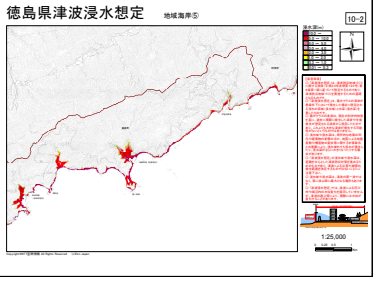
■文化人類学的フィールドワーク教育の特徴



ポスト東日本大震災（南海トラフ巨大地震）の新津波想定

県、津波高の暫定値公表　美波で最大２０メートル超の津波に（徳島新聞 2011.12.22）

徳島県は２１日、南海トラフでマグニチュード（M）９クラスの巨大地震が発生した際に県沿岸に押し寄せる新たな想定津波高（暫定値）と浸水予測を公表した。津波の高さは美波町阿部漁港で最大２０・２メートル、海陽町宍喰海岸で同１８・７メートルに達するなど、蒲生田岬（阿南市）以南では現在の想定の３倍前後に津波高が上昇する地域が現れている。浸水範囲は鳴門市や徳島市など県北部でも大きく広がり、沿岸部の各自治体は対策の抜本的見直しを迫られそうだ。
県はこれまで、南海・東南海地震がM８・６の規模で同時発生した場合を想定し、２００４年に津波浸水予測を公表。しかし、東日本大震災の発生で巨大津波を想定した対策をいち早く市町村に進めてもらう必要があるとして、新たな津波高を独自に試算していた。



災害リスクが地域社会に与えたインパクト

- **災害のリスク認識の激変**
  - 災害リスクをめぐる国家や地方自治体による政治のなかで、人びとの災害リスク認識が一夜にして転変
  - 限界集落が多い南部沿岸地域の集落に大きなインパクト
  - 行政による対応も遅れがち

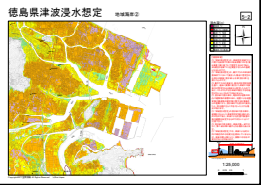
徳島県で最も高い津波の襲来が新たに予測された県南部沿岸地域における住民の災害リスク認識と対処方法について調査

自然と文化の交点としての災害

- 「災害」への人類学的アプローチ
  - 災害＝ハザード（自然）＋脆弱性（社会・文化）
    - 「ハザードと脆弱性が結びつくことで、既存の物理的状態や社会・文化的秩序が混乱／中断したと認識されるに至った事象[アンソニー＝オリヴァー・スミス 2006: 8]」
      - **ハザード** [アンソニー＝オリヴァー・スミス 2006: 8]
        - 社会や環境に損害を及ぼす可能性のある諸力
          - ハリケーン、地震、土石流、原子力施設、殺虫剤….etc
      - **脆弱性** [ブレイキー 1994: 34]
        - ハザードの衝撃に備え、対処し、立ち直る人間の能力
  - 文化人類学の立場から地域防災に貢献することが可能に
    - これまで津波防災は工学部や総合科学部の理系の教員が対応

【事例１】地域調査法・実習（2年生）

- 日常化した非日常を（再）異化する経験
  - 大学周辺地域は3mの浸水予測
  - 学生の関心は低い
    - 他県の災害ボランティアに行く学生
- 社会調査士資格関連科目（2コマ×通年）
  - ４月–予備調査
  - ６月–避難訓練の企画・実施
  - ７－９月–第一回調査実施（各班1回×5）
  - １０－１１月–第二回調査実施（各班1回×5）
  - １１月–防災ワークショップ参加
  - １２月–防災に関するアンケート調査実施
  - ２月–現地での報告会



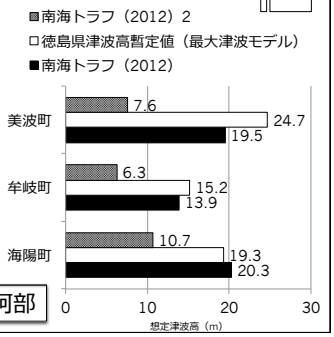
徳島県南部沿岸地域の概況

- たびかさなる津波の被災経験
  - 1512年,1605年,1707年,1854年,1946年 [田井 2005]
  - さまざまな被災記録・記憶
    - 津波碑・古文書（「震潮記」）・聞き書き集
- 交通の要衝から「陸の孤島」へ
  - 宍喰（海陽町）の祇園祭（京都から宮大工を呼ぶ）
  - 昭和１２年　国鉄牟岐線　開通
  - 昭和１３年　航路の廃止
  - ⇒高度経済成長期の都市への人口流出

[由岐町教育委員会、1994]

【国勢調査　徳島県】

南部沿岸部における津波予測状況



阿部一地域防災の「問題児」

- 災害の伝承
  - お寺の過去帳にわずかな記録
- 地形的な特徴
  - 鹿ノ首岬が自然の防波堤
  - 過去500年間は3m程度の浸水
- 地域防災の「問題児」
  - 行政指導に従わない
  - 形骸化していた自主防災組織
- 災害リスクの激変
  - ３mから20.2mへ
  - 集落最高の建物は16m
  - 過去の被災経験（災害文化）がない

「問題児」から「優等生」へ

時期	おもな出来事	作成した避難路
2011.12	南海トラフ新想定発表	藍谷路
2012.1	町内会から独立した自主防災組合設立	八幡屋路 上村路
2012.2	阿部住民全体集会 （自主防災組合承認）	松村路　家山路 八毛路　横本路 喜多條路　西寺路 東寺路　山賀路 五軸路　松下路 観音路　宮前路
2012.2-	避難訓練など	御旅路　尾鼻路 天神山路　常陸路 海沿路

地域住民が短期間に町内会から独立した自主防災組合を設立し、20本の避難路(マイ避難路)を作成

地域住民による「マイ避難路」

■複数の避難路
- 20本の避難路を整備し、集落のどこからでも10分以内に海抜20m地点まで移動可能

■集落点検の実施
- 要介助者・程度の把握
- 率先避難者の指定

高齢者などの災害弱者に配慮した避難体制の整備

「マイ避難路」の特徴

図1. 避難路の性質

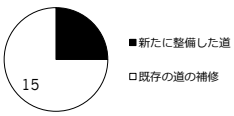


図3. 避難路の整備者

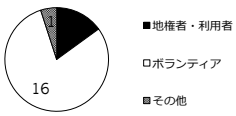
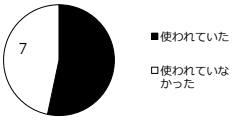


図2. 補修された道の状態



1. 過去に別の目的で使われていた道を避難のために再利用

2. 地元の有志によるボランタリーな活動により整備

「マイ避難路」とは何だったのか？

■他者と自己に配慮した避難路づくり
- 新想定直後に20もの避難路が造られたことは、リスク対処という観点だけでは理解できない（当初は他の沿岸部ではおこなわれなかった）
  - 高齢者による高齢者への配慮
  - 「生きがい」としての避難路づくり
- 無力にみえた「被支援者」らの手による画期的な対処策
  - 徳島県内の防災モデル地区に

■地域のソトとウチを繋ぐ道
- 町内会（行政主導）から独立した自主防災組合を形成
- 集落の人びとが地域外の集落出身者・行政・大学を巻き込みながら活動を展開

23

【事例２】基礎ゼミナール（1年生）地域社会との避難器具の共同開発

- マイ避難路整備後の阿部における課題
  - 歩行困難者等の災害弱者の避難の支援
  - 11分で津波到達。地震発生からから避難行動開始まで4-5分、家から避難路まで2-3分。避難路に早く到着した人は2-3分間の支援が可能。
- ユニバーサルな避難器具
  - 現在販売されている避難器具は、さまざまな状況に対処可能な一般性を確保するために、装着・使用法がやや複雑で訓練が必要なことが多い。
  - 阿部の状況で、緊急時にマニュアルを読む時間は無い
- 避難器具のローカライズ
  - 特定の住民が必要とする機能を絞り込み、簡単・素早く使用可能で安価な避難器具を作成

http://tanakageka-daycare.blogspot.jp/2012_10_01_archive.html

24

担架（初期のものと改善したもの）

担架（ロングサイズ）

担架(ハーフサイズ)

小型化、持ち手の改良を実施

初期モデル（ロングサイズ）の問題点

25

避難路	被支援者	支援者	時間
尾鼻路（舗装された坂）	男性（70kg）	4人（30代男性×1、10代男性×2、10代女性×1）	2分21秒

【問題点】

・ベルト装着に時間がかかる
・4-6人の支援者で被支援者を運べるが、支援者同士の足があたり、移動が遅い
・持ち手が手に食い込み、痛い。
・被支援者は移動方向を目視できないため、不安感

改良モデル（ハーフサイズ）をもちいた実験

26

避難路	被支援者	支援者	時間
尾鼻路（舗装された坂）	男性（70kg）	4人（30代男性×1、10代男性×3）	1分26秒
			1分21秒
	女性（45kg）	2人（10代男性×2）	1分15秒
			1分28秒

【改善点】

・ベルト装着をしなくても座位が安定
・2-4人の支援者で支援が可能に
・支援者同士の足があたらない
・避難速度の向上
・持ち手にクッションを入れ、痛み低減
・被支援者も進行方向を目視可能

ハーフサイズをもちいた支援実験

27

フィールドワークの成果還元と効果

28

■還元した成果
- 地域調査実習（着任一年目）
  - 高齢者を巻き込んだ初めての避難訓練の実施
  - 研究成果の現地報告会
  - 住民の防災意識や防災活動に関する報告書（200p）
- 基礎ゼミナール（着任二年目）
  - 研究成果の現地報告会
  - ローカライズした避難具の設置

■効果
- 高齢者が避難の見通しをもつようになった
  - 先に避難したものは、支援可能時間を知ることができる
  - 要支援者も、避難口まで逃げれば支援されるということがわかる

→ 高齢者が自主的に運動をするように

これまでのフィールドワーク教育/PBLで気をつけたポイント

■学生に責任をもたせること
- 自腹を切る（おカネ、時間）、リスクのある場所に身を置く（資料1）
- ひとたび大学を出たら、学生も市民社会の一員
- 地域のニーズに則した「成果」を必ず残す

■具体的な社会問題の解決に携わること
- 「問題」の所在を発見し、その解決にかかわる喜び・手応え
- 期間内に解決可能で社会的な意義が高い「課題」の選定が不可欠
  - 地域社会や行政とのつながりづくり
  - マネジメントが非常に大変（コンサル先生）

文化人類学的なフィールドワーク教育の可能性：マーケットの視点①

■学生
- 実習・基礎ゼミナール・ゼミともに希望者が多い
- 地域（僻地）に「われわれが学ぶ価値のあるものがある」という気づき
- 様々なプロフェッショナルと協働する中で「私ができること」を意識

■地域社会
- 「地域の論理」を理解してほしいという要望
  - 「たくさんの人間に「マイ避難路」について説明するが、みな表面的な理解しかしない。こちらがなぜ、どういう理屈でやっているのかまとめてほしい」
  - 「なぜ、そうするのか」ということの理解（コンテクストの理解）を含めた「厚い記述」

文化人類学的なフィールドワーク教育の可能性：マーケットの視点②

- 行政
  - 調査地の地方行政から補助金を獲得
    - A町「学生フィールドワークプロジェクト」30万円
    - B町「観光振興プロジェクト」200万円
  - 地域のニーズにもとづく新提案の要望
    - ワンショットサーベイ的なものではなく、地域社会との関係性の中で得ることのできるビジョン
    - 「行政のニーズ」と「地域のニーズ」は異なる
- 大学
  - 徳島大学学長裁量プロジェクト (資料2)
    - 「地域の発展に資する臨地教育/研究拠点の形成（H25-26）」
      - 地域に物理的な拠点を形成するものとは異なり、臨地教育/研究を推進する上で欠かせない地域社会とのつながりの資源化
        - 文化人類学・社会学・地理学・心理学・スポーツ科学・生態学・アート・建築学

文化人類学的フィールドワーク教育の強み？

- 「地域」に継続的に入り、暮らしの中で考えること
- 自分には受け入れがたいが関わらざるをえない「他者」とともに生きるやりかたを探ること
  - 「劣った」、「遅れた」と思いがちな他者と協働し、学ぶ
    - 「変わるのはわたしたち（チェンバース 2000）」

→これらを実践できる人が思いのほか少ない

- 工学・マクロ系社会科学が主流の場所で
  - 古典的な文化人類学的フィールドワーク教育を実施したところ、思いのほか社会的なニーズがあった
  - おかれているそれぞれの状況で、何が求められているか？

「学生とともに地域に暮らす」こと

- レジデント型研究者
  - 「地域の内部に深く入り、そこに介入する正統性を地域の人びとから獲得しながら、共に知的生産を果たそうという協働的な研究者[菅 2013; 佐藤2009]」
- 新しい知識生産と社会実践の理想像[菅 2013:226-227]
  - ①応用的・実践的であること
  - ②脱学問領域的であること
  - ③脱立場的・脱属性的であること
  - ④協働的であること
  - ⑤実体的な現場主義であること
  - ⑥再帰的・順応的であること

→既存の知的生産と社会実践が覆い隠してきた様々な「あたりまえ」を再考する

今年のテーマ：世界農業遺産登録

卒論テーマ

- 「里山は生態資源か？―徳島県美馬郡つるぎ町における環境観光をめぐる諸アクターの実践から―」
- 「情動に身をゆだねる　―ガールズバー従業員と客の恋愛からの考察―」
- 「『観光市』という場の創造:文化の創造と力に関する人類学的研究」
- 「メタボを生きる：中高年の体重管理実践における力と美学」
- 「波と社会―南海トラフ新想定が徳島県沿岸部のいち漁村に与えたインパクトに関する人類学的研究ー」
- 「自立とは何か？－徳島県西部の限界集落における高齢者の日常生活